

# 備後「草津」と御家人長井氏

## 領主拠点としての港湾集落

Bingo “Kusazu” and the Nagai Family : A Port Town as a Feudal Lord’s Base

鈴木康之

SUZUKI Yasuyuki

はじめに

- ①草戸千軒町遺跡の概要
- ②集落と武家領主との関係
- ③出土資料が示す領主拠点

おわりに

### 【論文要旨】

草戸千軒町遺跡は、広島県福山市に所在する13世紀中頃から16世紀初頭にかけて存続した集落の遺跡である。この集落は福山湾岸に位置する港湾集落で、鎌倉時代には「草津」、室町時代には「草土」などと呼ばれていたと考えられる。遺跡は、文字資料では明らかにしなかった中世における民衆生活の実態を明らかにしたことが評価され、集落の住人は文字資料に記されることのない庶民が主体であったと考える傾向が強かった。しかし、発掘調査の成果にもとづき、集落の変遷過程を地域社会の動向のなかに位置づけていくと、集落の成立・停滞・再開・終焉といった画期に、武家領主の動向が大きく影響をおよぼしていたことが考えられるようになった。

本稿では、13世紀中頃から14世紀前半の鎌倉時代後期における集落変遷の背景に、鎌倉幕府の御家人で備後守護や長和荘地頭に任じられていた長井氏が関与していたことを想定した。発掘調査した集落の中核に位置する「中心区画」と呼ぶ区域の出土資料に注目すると、井戸には当時最も「格」の高い場所に存在した多角形縦板組の井側をもつものが集中し、木簡からは近隣地域との商品・金融取引の拠点として機能していたことがうかがえる。また、当時最先端の文化活動であったと考えられる闘茶が行われていたことを示す闘茶札が、中国産天目茶碗・茶入をともなって出土し、白磁四耳壺・青白磁梅瓶・吉州窯系鉄絵瓶子といった座敷飾りの陶磁器も出土している。ここに、「会所」に比定できる施設が存在していたことが想定できる。

以上のような「中心区画」の卓越性は、この集落が武家領主の地域支配の拠点であったことを示していると考えられる。

【キーワード】 草戸千軒町遺跡, 中世港湾集落, 長和荘, 地域経済拠点, 闘茶

## はじめに

瀬戸内海沿岸に位置する中世の港湾集落跡・草戸千軒町遺跡（広島県福山市）は、中世集落遺跡の先駆的な発掘調査事例として知られている。遺跡の発掘調査は、福山市街地を流れる芦田川の河川整備事業にともなう緊急調査として実施されたため、調査された遺構は現地に残ってはいない。しかし、100万点を超える出土遺物は広島県立歴史博物館（ふくやま草戸千軒ミュージアム）に収蔵され、その一部の2,930点が2004年に国の重要文化財に指定されている。出土資料や関連する文字資料の研究成果により、発掘調査された集落は13世紀中頃から16世紀初頭にかけて地域経済の拠点として機能し、「草津」あるいは「草土」などと呼ばれた港湾集落であったことが明らかになっている<sup>(1)</sup>。

この遺跡の学術的な意義としてまず指摘できる点は、文字資料にその存在が確認できなかった港湾集落の姿が考古学的な発掘調査によって明らかになり、日本列島の沿岸各地に同様の集落が存在する可能性を示唆したことにある。また、出土資料から明らかにされた地域経済拠点としての港湾集落の特質は、列島各地の地域社会が広範な地域との交流のうえに成り立っていた実態を描きだした。さらに、当時の民衆生活の姿を具体的に示す多様な生活用具が出土したことにより、文献資料や絵画資料では明らかにしがたかった中世の生活文化を復元するための豊富な手がかりを提供することになり、中世史研究における考古学の重要性を広く認識させた。

こうした遺跡の評価は、1980年代に中世史研究における潮流の一つとなったいわゆる「無縁」論と結びつき、中世都市の「無縁」性を示す具体的事例として取り上げられ〔網野 1984〕、「草戸千軒」と呼ばれる集落の住人は、文字資料に記されることの少なかった「民衆」「庶民」、あるいは「非農業民」であったとする理解が一般的になっていった。いわば領主権力とは対極にある場としての、この集落の特質が強調されることになったのである。

一方、出土資料の分析にもとづいてこの集落の成立から終焉にいたる変遷過程を復元し、関連する文字資料なども参照しながら、発掘調査の成果を地域社会のなかに位置づける作業を進めていくと、集落の変遷過程の画期に武家領主の動向が密接に関係していることが想定できるようになってきた。具体的に名を挙げるならば、鎌倉時代には備後守護や長和荘地頭に補任されていた長井氏、室町時代には備後守護・山名氏の被官として活動した渡辺氏の活動拠点として、この集落が地域社会のなかで役割を果たしたことが考えられるようになったのである〔鈴木 2007〕。

もちろん、この遺跡の出土資料から復元できる物流・金融活動や手工業生産、あるいは港湾業務などが、多様な職能民によって担われていたことは間違いなく、その意味においては「民衆の町」といった理解にも妥当性はある。ただ、集落の成立・停滞・終焉といった集落景観を大きく変化させる画期の背景には、武家領主が地域社会に及ぼした影響が反映されていたと考えざるをえず、集落経営の実態やその特質を解明するには、領主権力との関係を分析することが重要な課題となっている。

武家領主と集落の関係をめぐっては、室町時代における渡辺氏の動向についてすでに基礎的な研究成果をまとめている〔広島県立歴史博物館（編）2013〕。そこで本稿では鎌倉時代の状況に焦点を

絞り、領主の動向と出土資料との関係を検討してみたい。

なお、この集落の名称は一般的に「草戸千軒」と呼ばれているが、これは集落がすでに消滅していた江戸時代の地誌に記された名称であり、鎌倉時代には「草津」と呼ばれていた可能性が高いため、ここでは「草津」という名称を用いることにする。<sup>(3)</sup>



図1 草戸千軒町遺跡の位置（国土地理院 20 万分の 1 地勢図「岡山及丸亀」を使用）

## ①……………草戸千軒町遺跡の概要

### (1) 集落の立地

草戸千軒町遺跡は、芦田川河口に形成された三角洲の南西端に位置している（図1）。現在、遺跡から海岸線までは6km以上離れているが、これは近世以降の福山湾の干拓や埋め立てによって陸地が沖へと拡張された結果であり、中世の段階の海岸線は遺跡中央部から南に1kmほどの場所にあったと考えられている。

遺跡の発掘調査は福山市街地の西部を流れる芦田川の中洲で進められたものの、かつての集落が河川の中洲に立地していたわけではない。1920年代以降の治水工事によって芦田川の流路が付け

替えられた結果、遺跡が河川敷に埋もれることになったのである〔鈴木 2012〕。また、中世段階における芦田川の流路は確定できておらず、集落と河岸・海岸との位置関係については不明確な点を残しているが、集落が河岸あるいは海岸に直接面していたことを示す遺構は、調査範囲内では確認できていない。その一方で、掘割の役割を担ったと考えられる複数の水路が集落内をめぐっていることから、こうした水路によって河海と結ばれていたと考えられる〔鈴木 2016b〕。つまり、集落は河岸・海岸からやや奥まった場所に位置していたことが想定できる。

なお、江戸時代中期に福山藩士・宮原直御<sup>なおゆき</sup>によって編纂された地誌『備陽六郡志』には、寛文13年（1673）の洪水によってこの集落が消滅したかのように解釈できる記載があり、かつては近世前期の洪水により集落が消滅したと理解されてきた。しかし、その後の発掘調査や研究などからは、近世前期まで集落が存続したことは確認できず、16世紀初頭に終焉を迎えていたと判断している〔鈴木 2012〕。

## (2) 集落の変遷過程

集落の変遷過程は、遺跡内で普遍的に出土している土師質土器（椀・杯・皿）の型式編年を基準に、遺構の重複状況なども考慮しながら、大きくはⅠ期前半・Ⅰ期後半・Ⅱ期前半・Ⅱ期後半・Ⅲ期・Ⅳ期前半・Ⅳ期後半という7段階でとらえている。さらに、Ⅱ期後半は古段階・新段階、Ⅳ期後半は古段階・新段階に細分することが可能である。また、中世集落が成立する前段階の平安時代前期の遺物も出土しており、その時期を前Ⅰ期としている。

以下には、前Ⅰ期からⅣ期後半にいたる集落変遷の概要を提示しておく（図2・3）。なお、各段階の暦年代は、〔鈴木 2016c〕で論じた年代観に依拠している。

### a 前Ⅰ期（9世紀末～10世紀代）

中世集落の遺構面の下で、9世紀末から10世紀にかけての土師質土器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器などが出土する包含層を検出している。明確な遺構が検出できないことや、11世紀から12世紀にかけての遺物がほとんど確認できないことから、9世紀末から10世紀頃に何らかの施設が存在したものの11世紀代を迎える前に廃絶し、13世紀中頃にその跡地を整地して中世集落が建設されたと理解している。緑釉陶器、黒色土器などが出土していることから、官衙に関連する施設の存在が想定できるが、具体的な施設の性格は明らかにできていない。

### b Ⅰ期前半（13世紀中頃）（図2-a）

13世紀中頃になると、遺跡中央から北部にかけての区域に井戸や曲物埋設遺構<sup>(4)</sup>が分布するようになる。遺跡の中央部を中心に何条かの溝が検出されているが、これらは集落の施設を建設する際に構築された排水溝だと考えられ、それらの配置から方形の区画が接続していたことが想定できる。また、遺跡南部には自然流路や墓が存在するものの、井戸など生活に関係する遺構は分布せず、この段階には居住地としての開発が進んでいなかったようである。

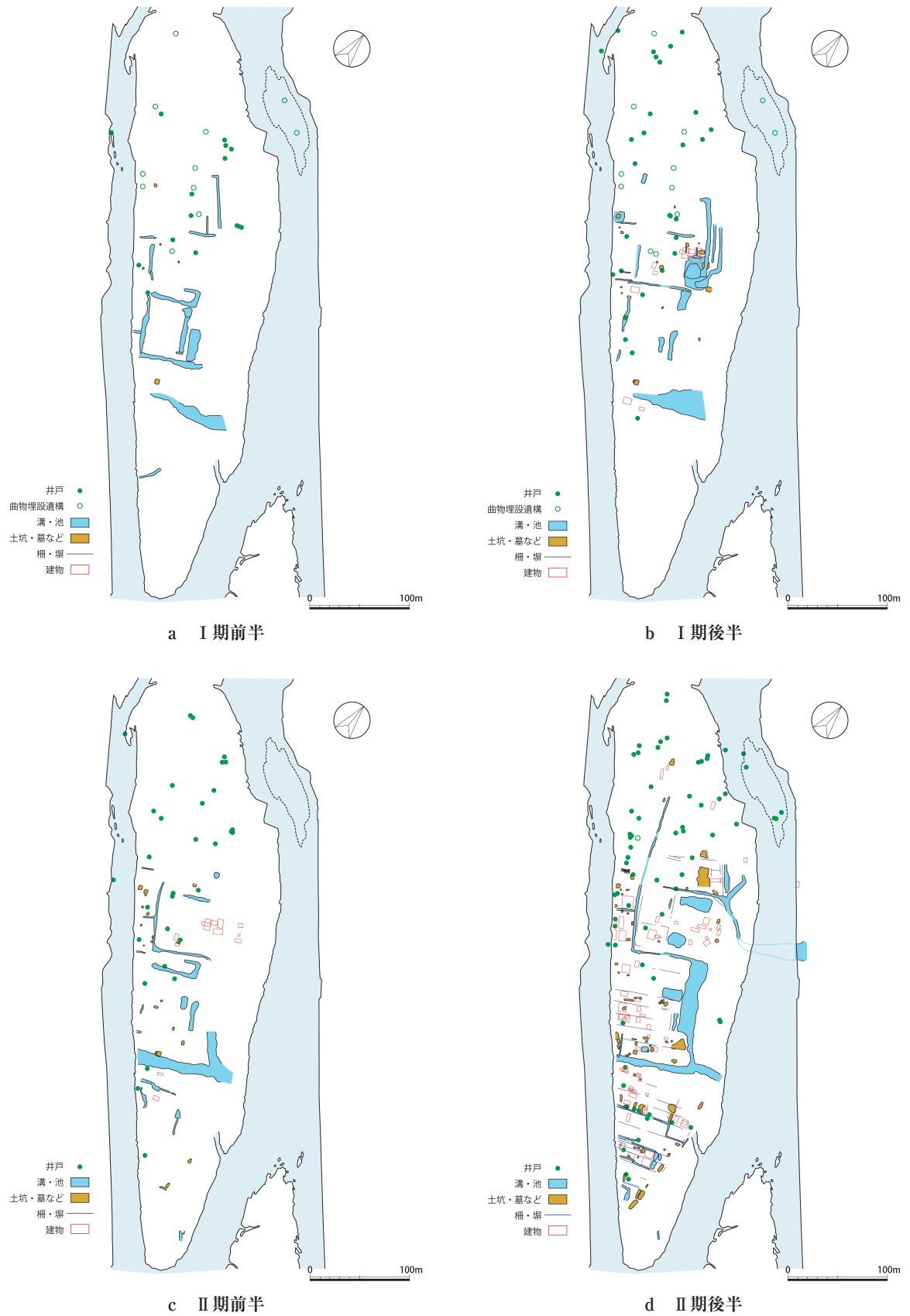


図2 草戸千軒町遺跡における集落の変遷(1)

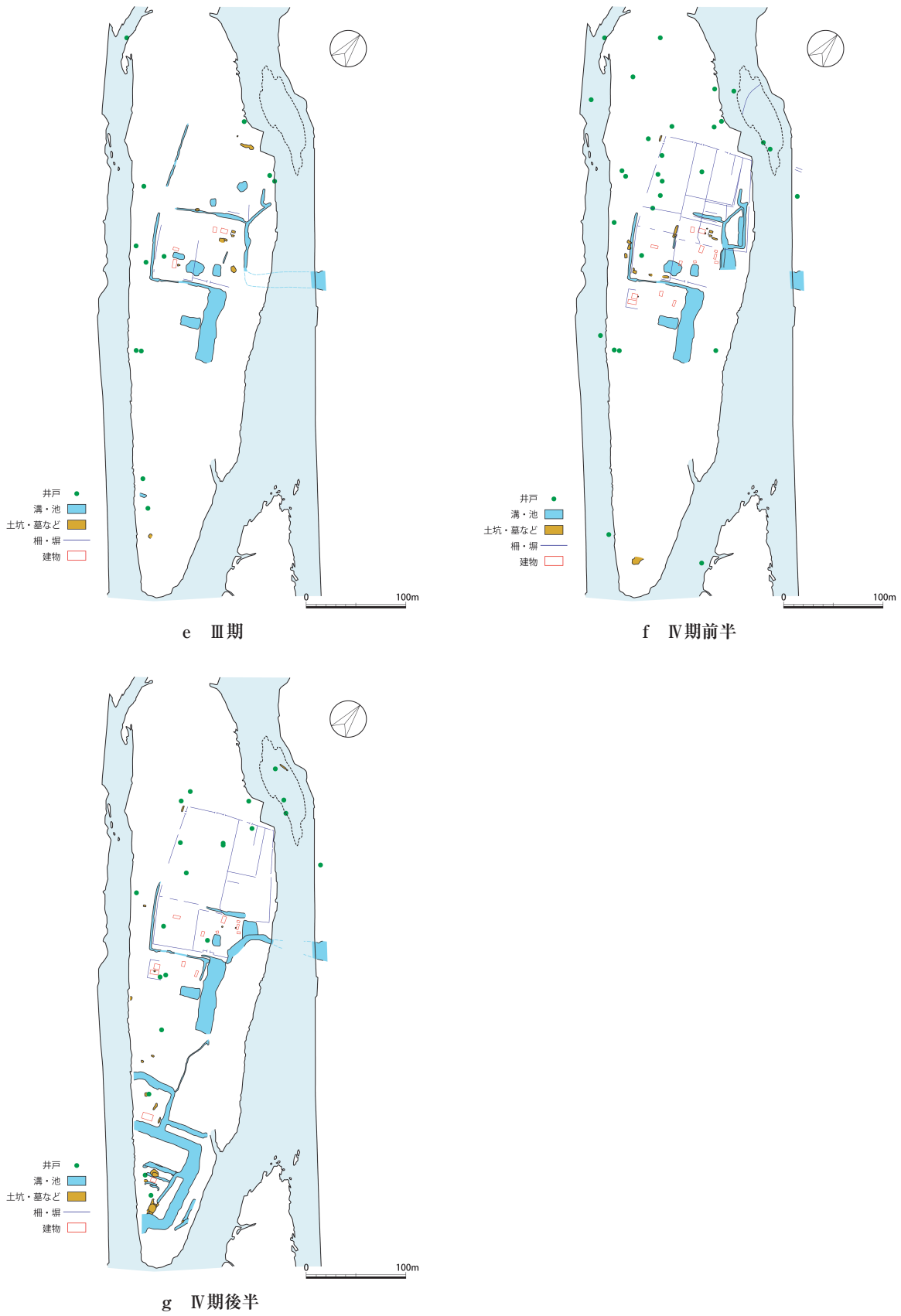


図 3 草戸千軒町遺跡における集落の変遷 (2)

### c I期後半（13世紀後半）（図2-b）

13世紀後半には井戸の数が増え、その分布が遺跡南半にも広がっていることから、居住域が南方にも拡大したことがわかる。また、遺跡中央部の北半には集落の成立当初から終焉まで一貫して遺構が存在し、出土遺物の質・量が卓越する区域がある。ここを「中心区画」と呼んでいるが、I期後半にはそこで大規模な建築・土木工事が繰り返された状況が確認でき、集落施設の整備が急速に進められたことがうかがえる。

### d II期前半（14世紀初頭）（図2-c）

I期後半までの土木・建築工事によって、II期前半には遺跡中央から北半にかけての町並みがおおむね完成したものと思われる。また、この時期には遺跡南半を流れていた自然流路も人工的な掘割に整えられ<sup>(5)</sup>、水路のめぐる集落の景観が出現している。

### e II期後半（14世紀前半）（図2-d）

14世紀前半、おそらくは1320年前後から1330年前後にかけての時期に集落は最盛期を迎えたものと思われ、集落全域に多数の施設が構築されている。それらの施設の重複関係からII期後半古段階・新段階に細分することができる。集落の基本的な区画は前段階までのものを継承しているが、「中心区画」東部に掘割が取り付くようになること<sup>(6)</sup>、遺跡南半に東西方向に細長い短冊形の区画が展開することなどが、この段階の施設の特筆すべき点である。

II期後半の終末年代は1330年代の初め頃、すなわち鎌倉幕府の最末期に相当する時期と考えられ、この時期に集落全域で多くの施設が廃絶している。その後、III期の開始時期に比定している15世紀前半までの間、ほとんど遺構が確認できない期間が続くことから、集落が停滞、あるいは衰退した状態に追い込まれるような重大な出来事が生じていたと考えられる。ただ、完全に集落が廃絶したわけではなく、中洲東側の高水敷部分で実施された法音寺橋改築工事ともなう発掘調査では、14世紀中頃の遺物がまとまって出土している[福山市教育委員会(編)1997]。集落内の一部には、施設が存続する区域があったものと考えられる<sup>(7)</sup>。

### f III期（15世紀前半～中頃）（図3-e）

15世紀前半になると、前述の「中心区画」周辺で集落の再開発が始まる。この再開発の動きは、II期後半に廃絶した施設を再構築するという形で確認できる。具体的には、II期後半に埋められた「中心区画」の東に接する掘割（北部水路）が再び開鑿され、「中心区画」西辺の道路側溝と考えられる溝なども掘り直されている。南部水路については、中央部に形成されていた船溜まり状の箇所が埋まりきらず、池状の湿地として残存していたようであるが、かつてのように集落外へは続いていなかったものと考えられる。

### g IV期前半（15世紀後半）（図3-f）

15世紀後半に入る頃には井戸などの施設の数も増え、集落の再開発が継続して進められたことがうかがえる。「中心区画」が塀や柵で区画されること、北部水路の一部が石積みの護岸をもつよ

うになることなどが、この時期の集落景観の特徴である。

Ⅳ期前半の終末年代は1470年代を想定しており、この段階に再び多くの施設が廃絶している。土壁造りの倉庫（土蔵）が焼失したことも確認でき [鈴木 2010]、応仁文明の乱（1467～1477）による社会の動乱がこの集落にも及んだものと理解している。

#### h Ⅳ期後半（15世紀末～16世紀初頭）（図3-g）

Ⅳ期前半の施設廃絶後、それほど時間をおかずに集落は再建されているが、集落景観には変化が見られる。最大の変化は、集落南部に幅約10mの環濠で囲まれた一辺100mほどの方形の居館が成立することである。また、居館の北辺にも環濠をもつ一辺50mほどの屋敷地が取り付いている。方形居館の西部は河川敷となっており未調査であるが、いくつかの屋敷地が接続していた可能性もある。一方、遺跡の北半には前代の区画を踏襲する塀・柵で囲まれた区域が存在するが、「中心区画」に取り付く水路（北部水路）は、Ⅳ期前半に廃絶したままとなっている。この段階の集落は、北半の集落、南半の居館という二極に分化した構造であったと理解できる。

16世紀初頭、おそらくは1510年代頃と考えられる時期になると、集落内の施設が一斉に廃絶している。かつては洪水による消滅と考えられたこともあったが、多くの施設は人為的に埋め戻されていることから、洪水のような自然災害による消滅とは考えられず、社会的・政治的な要因によって集落は終焉を迎えたと結論づけている。

## ②……………集落と武家領主との関係

### (1) 長和荘地頭・長井氏

前章に概略をまとめた集落変遷のうち、Ⅰ期からⅡ期にかけての時期、すなわち集落の成立から発展を経て衰退・停滞期を迎えるまでの、鎌倉時代後期に相当する時期の集落動向に関与したと考えられるのが、鎌倉幕府御家人の長和荘地頭・長井氏である。以下、長井氏と集落との関係について検討する。

草戸千軒町遺跡の西方に広がる丘陵一帯は、皇室領荘園である長和荘の荘域に比定されており、現在の福山市瀬戸町長和はその遺名と考えられている。長和荘は、嘉元4年（1306）の「昭慶門院御領目録」によれば、領主の藤原惟方が永治元年（1141）に歓喜光院に寄進し、その後八条院領として伝領され、安居院悲田院が領家となっている。立荘の経緯は不明ながらも、鳥羽院政期に成立したものと考えられている [広島県（編）1984]。

また、瀬戸町長和に所在する福井八幡宮は、近世地誌によれば周辺の長和・地頭分・山北・神島・草戸・水呑・田尻各村の総氏神であったことが知られ、長和荘域はそれらの村を含む沼隈半島の北東部一帯に広がっていたことが想定されている [平凡社（編）1982]。遺跡の所在地も近世の草戸村に含まれることから、発掘調査された集落も長和荘内の集落であったと考えられる。

以上のようなことから、この集落は長和荘内の荘園市場や年貢積出港の役割を担っていたと理解されることもあった。ただ、長和荘成立期とされる12世紀代の遺物はほとんど確認できず、立



荘が集落成立の直接的な契機になったとは考えにくい。発掘調査によって明らかになった13世紀中頃という集落の成立年代を重視するならば、長井氏が長和荘地頭に補任されたことが集落成立の背景にあったと考えるべきだろう。

鎌倉幕府御家人の長井氏は、大江広元の第二子・時広を祖とし(図4)、承久の乱(1221)ののち長井時広が備後守護に任じられたのをきっかけとして、備後地域に勢力を伸ばすことになったとされる。守護職のほかにも、備後国内には小童保(三次市)・田総荘(庄原市)・長和荘(福山市)・信敷荘(庄原市)の地頭職を得ていた。備後守護職を相伝したのは時広の子・泰重から頼重・貞重にいたる系統で、六波羅評定衆を兼務していた。泰重の弟・泰茂の系統は長和荘地頭職を相伝するが、のちに長和荘地頭職は東方・西方に分割され、泰茂の系統(福原氏)は長和荘西方地頭職と信敷荘とを相伝した。いっぽうの長和荘東方地頭職は小童保・田総荘の地頭職とともに、泰重の子・重広の系統(田総氏)が相伝している[小泉 1970, 佐藤 1971, 広島県(編) 1984]。

13世紀後半と考えられている「備後国長和庄領家地頭所務和与状」(田総文書)は、領家である安居院悲田院と西方・東方両地頭との間で交わされたものであるが、「山河海事」という項目が立てられており、山河海については地頭方の管領とし年貢課役の沙汰を義務づけている[広島県(編) 1984]。ここからは、長和荘が河海に接する領域を占めていたことや、海浜部の支配が地頭に委ねられていたことがわかる。このような状況が、長井氏によって拠点となる港湾集落が建設される背景にあったと考えられる。

こうして、長井氏は備後国内の複数の所領を獲得することにより、備後国内の支配を展開していったものと考えられるが、長和荘をのぞく所領はいずれも備後内陸部に位置していた。長和荘のみは瀬戸内海沿岸の芦田川河口に位置しており、一族の備後国内の所領を瀬戸内海水運へと結びつけることが可能であった。そのための拠点として13世紀中頃に建設したのが、「草津」と呼ばれた港湾集落、すなわち草戸千軒町遺跡として発掘調査された集落であったと考えられるのである[鈴木 2007]。

## (2) 領主拠点としての「草津」

発掘調査された集落と長井氏との関係についてはすでに河合正治による言及があり、長井氏守護家の泰重・頼重・貞重の系統が京都に本拠を置きながらこの集落に代官を派遣し、守護所の外港としての機能を担わせていたことを想定している[河合 1974]。さらに河合は、『高野山文書』『金剛

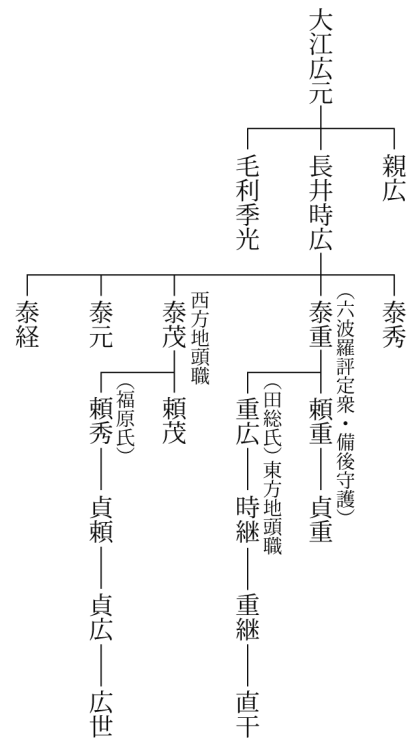


図4 長井氏略系図

峯寺文書』に記された備後守護・長井貞重の代官・円清が高野山領の尾道浦に乱入した事件について、守護代らがこの集落を拠点に活動した可能性も指摘している。

この事件は、文保2年(1318)に幕府が西国で活動する悪党を鎮圧するための使節を派遣したところ、尾道浦の寺家側(高野山)がこれを阻止しようと六波羅探題に訴え、相論になったものである。翌元応元年に幕府の使節が帰ると、長井貞重は尾道浦が悪党をかくまっているという名目のもと、守護代・円清とその子・高致らの軍勢を大船数十艘に分乗させ、尾道浦に乱入させた。その際、守護代らの軍勢は寺社仏閣数カ所、民家一千余宇を焼き、さまざまな悪行をほしのままにしたという。河合は、このとき尾道に攻め込んだ大船数十艘は、守護所の外港であった「草戸」(=草津)の集落を出発したことを想定している。

『金剛峯寺文書』などの記載からは、守護代の拠点がどこにあったのかをうかがうことはできない。ただ、多数の船で尾道に攻め入っていることや、守護側も悪党(名誉賊徒)をかくまっていると寺家側から非難されていることなどからは、守護側が港湾を拠点にしていたことをうかがうことができ、その有力な候補として「草津」を挙げることができるだろう。

前述のように、遺跡の発掘調査範囲内では集落が河海に直接面していたことを示す遺構は検出できていないが、14世紀前半には集落の北部と南部とに掘割と考えられる水路が整備されており、この水路によってさまざまな物資が搬入・搬出され、この集落の経済拠点としての機能を支えていたと考えられる。また、船を係留する船溜まりの機能を有した可能性のある遺構(SG3060)も確認できる[鈴木2016b]。ただ、これらの水路は検出面での幅がおおむね5m程度、深さは80cm程度で、往来した船の多くは刳船構造の小型船であったと思われる。『金剛峯寺文書』に記される「大船」が出入りできたかどうかは疑問であるが、そうした大型の船は、艀に代表される近隣の港湾から尾道に向けて出発したとも考えられる。

### (3) 常福寺と「草津」

遺跡の西側に広がる丘陵の裾には真言宗の寺院・明王院が存在し、本堂・五重塔が国宝に指定されている。この寺院は中世には西大寺流律宗の末寺で、常福寺と呼ばれていたことが『西大寺諸国末寺帳』の記載などから知られる。寺伝では大同2年(807)弘法大師の開基と伝え、本尊の木造十一面観音立像(国重要文化財)が平安時代初期の作とされることから、この集落が常福寺の門前町として成立したことも想定されていた。しかし、1962年から1964年にかけて実施された本堂の解体修理の際に実施された地下遺構の調査では、確実に平安時代に遡る遺構や遺物は確認できていない[国宝明王院本堂修理委員会(編)1964]。現存する本堂は内陣大虹梁上の蛙股下面に記された墨書銘から元応3年(1321)、五重塔は相輪伏鉢の刻銘から貞和4年(1348)に建立されたことが確認できる[国宝明王院五重塔修理委員会(編)1962]。こうした現存建物の建立年代からは、この港湾集落が地域における政治的・経済的な拠点としての立場を確立する過程で宗教的な拠点の必要性も高まり、常福寺が創建されるにいたったと考えるべきではないだろうか。そして常福寺の創建にも、長井氏の何らかの関与があったにちがいない。

ただ、五重塔の建立された貞和4年(1348)は集落の停滞期に相当し、後述するように備後地域南部での長井氏の地位もすでに低下していたと考えられる時期である。五重塔の建設という大事業

を、長井氏がこの時期に継続することは困難になっていたはずである。五重塔伏鉢の刻銘に記された「積一文勸進小資 成五重塔婆大功」、すなわち一文勸進の小資を募ることによりようやく五重塔を建立できたという表現は、そうした有力な支援者を失うなかで大事業が達成されたことを反映しているとも解釈できる。

なお、本堂・五重塔の建立年代を示す銘文には、両建物の建立に関与した人物として「沙門頼秀」「住持沙門頼秀」という人名が記され、これらは同一人物だと考えられる。この人物を長和荘西方地頭職を相伝した長井泰茂の子・頼秀に充てる説もあるが〔小林 1998・2004〕、長井頼秀の没年が不明確であることや、地頭職を相続し在京した可能性の高い人物が住持として名前を記されたのかなどの疑問もあり、今後さらなる検証が必要である〔鈴木 2016a〕。

#### (4) 「草津」の発展と停滞

守護代・円清らが尾道に乱入した元応元年（1319）は、集落変遷のⅡ期後半（古段階）に相当する時期で、この集落が大きく発展した段階である。前章で述べたように、Ⅰ期前半（13世紀中頃）に成立した集落は、Ⅰ期後半（13世紀後半）には「中心区画」で諸施設の整備が進められる。さらにⅡ期前半になると、遺跡南半にも居住域が拡大するなかで南部水路が構築され、Ⅱ期後半（古段階・新段階、14世紀前半）には北部水路や短冊形区画が整備されている。

こうした検出遺構に示される集落の発展状況は、後述するような出土遺物からもうかがうことができ、この集落が地域における拠点的な機能を有するようになっていたことがわかる。同時にその背景として、集落経営に関与した領主権力の伸展を想定することが可能である。守護代らの尾道への乱入も、そうした領主権力の伸展が、この地域の荘園領主側勢力との間に軋轢を呼び起こすなかで引き起こされた事件として理解できるだろう。

さて、Ⅰ期前半からⅡ期後半にかけて順調に発展をとげた集落ではあるが、Ⅱ期後半新段階には集落内で多くの施設が廃絶し、その後、半世紀以上におよぶ停滞期が訪れることになる。多数の施設が廃絶した年代について、筆者はⅡ期後半新段階を代表する遺構 SK1300 土坑から出土した木簡に記された十二支から、元弘元年（1331）あるいはその翌年のことと想定している〔鈴木 2016c〕。

備後地域における元弘元年の出来事としては、後醍醐天皇による鎌倉幕府討伐の動きに呼応して、備後国一宮（福山市新市町）で桜山慈俊が蜂起したことを挙げることができる（『太平記』）。この蜂起が地域社会に与えた影響については不明な点が多いが、「草津」が守護勢力の拠点であったとするならば、倒幕の動きは「草津」にも何らかの影響を与えたはずである。そうした地域社会の不安定な動向が、集落内の多くの施設を廃絶させる動きにつながった可能性が考えられる。

桜山慈俊の蜂起はただちに鎮圧されたものの、元弘3年・正慶2年（1333）には足利高氏が六波羅探題を攻め、続いて新田義貞による鎌倉攻めにより鎌倉幕府は滅亡する。鎌倉幕府の滅亡は、備後守護・長井氏の立場にも影響を与えたらしく、建武新政権のもとでは長井氏は守護職を失っており、代わりに朝山景連が備後守護職にあったことが確認できる〔広島県（編）1984〕。室町幕府成立後も、備後守護には仁木義長・石橋和義・細川頼春ら足利一門の有力者が補任されており、長井氏の名を見いだすことはできない。南北朝期における集落の長期間にわたる停滞の背景には、集落経営に深く関与していた長井氏の勢力がこの地域において後退したことを想定できるのである。

ところで、長和荘西方地頭職・信敷荘西方地頭職は、元徳元年（1329）に四条烏丸箒料所・鎌倉地などととも長井頼秀からその子・貞頼に譲与されている（『毛利家文書』1372号）。所領の一つとして京都に箒料所を有していることから、頼秀・貞頼らも六波羅評定衆として在京していたものと考えられている〔広島県（編）1984〕。そして、貞頼は元弘3年（1333）の足利高氏による六波羅攻めの際には5月6日の軍事催促を受け取り（『毛利家文書』1375号）、5月7日には高氏のもとに馳せ参じている（『毛利家文書』1376号）。すなわち、鎌倉幕府滅亡時に貞頼は新政権の側に与したことがわかる。しかし、備後南部での勢力を存続させることはできなかつたらしく、拠点を備後北部に移して福原氏として存続することになる。

こうして南北朝期には停滞あるいは衰退したと考えられる「草津」の集落であるが、この時期の「草津」に関する記事も存在している。『太平記』巻29の「越後守自石見引返事」には、観応2年（1351）、上杉朝定が山城八幡から瀬戸内海を経由して鞆に上陸し、「草井地」（「草津」を示すと考えられる）から二千騎の軍勢で備中方面に高師夏らを追撃したという記事があるほか、『萩藩閩閩録』巻99ノ2にある「内藤肥後徳益丸代審覚謹言上」からは、貞和5年（1349）、鞆に駐留していた足利直冬が「草津」を経由して尾道へ軍勢を動かしたことが確認できる。これらの記事からは、停滞期の「草津」が軍勢を集結させる場所として機能していたことを知ることができる。『太平記』にある二千騎が実数であるかは別にして、多くの軍勢が「草津」に集結できたのは、集落の停滞や荒廃によって空閑地が広がっていたことを示しているとも考えられる。そのいっぽうで、そうした軍勢への補給を可能にする機能も、何らかの形でひきつづき維持されていたことになるだろう。

### ③……………出土資料が示す領主拠点

#### （1）井戸の構造にみる「中心区画」の拠点性

前章では集落の成立・発展の背景に、備後守護、長和荘地頭であった御家人・長井氏の関与が想定できることを論じた。しかし、長井氏がこの集落に関与したことを具体的に示す文字資料は今のところ確認できていない。同様に、出土資料からも長井氏との関係を示す資料を見いだすことはできておらず、現段階で集落経営への長井氏の関与を実証することは難しい。

そのいっぽうで、この集落が地域経済の拠点として機能したことを示す出土資料はいくつか挙げることができる。こうした集落の拠点性を示す資料は、「中心区画」と呼ぶ区域からとくに多く出土しており、これらの出土資料から領主権力が集落にどのような影響をおよぼしていたかを検討するうえでの重要な手がかりを得ることができる。そこで以下には、「中心区画」から出土している多様な資料のなかから、その拠点性を示す特徴的な資料をいくつか紹介しておく。

「中心区画」は遺跡調査範囲の中央からやや北に位置する方形の区域で（図5）、西側は南北溝SD1170・2070、南側はその溝の折れ曲がった延長であるSD3140・3141によって区画されている。SD3140はさらに南方のSG3060を介して、前述した南部水路に接続している。「中心区画」の東側は遺構の残りがよくなく、東方への集落の広がりが不明確であるものの、前述の北部水路を構成するSD520・626によって区画されていたものと思われる。南北溝SD1170・2070、東西溝SD3140・

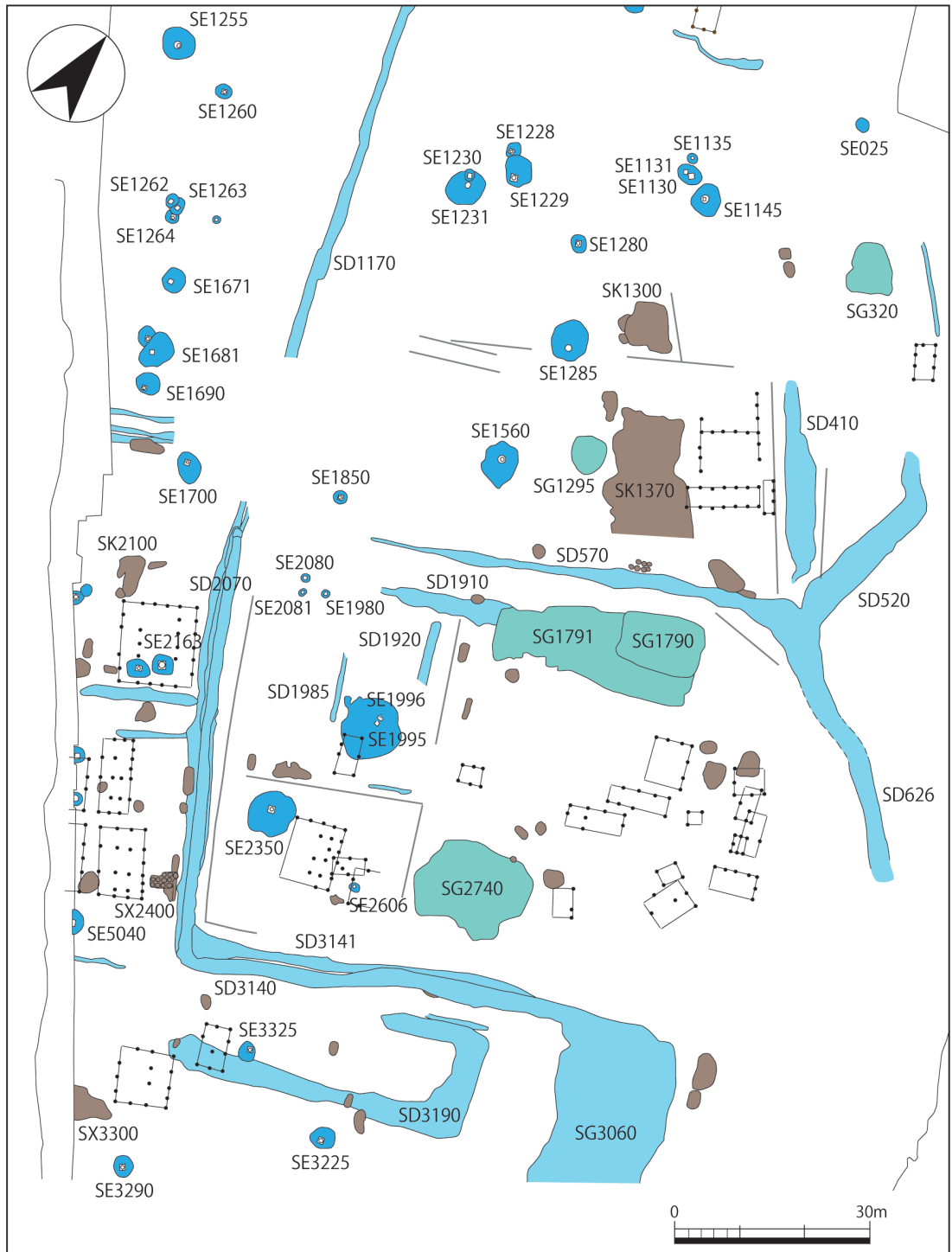


図5 中心区画におけるⅡ期の遺構配置

3141は、いずれも道路側溝と考えられ、南北溝の東、東西溝の北に接して道路が存在したことを想定している。このように捉えると、「中心区画」は北部水路と南部水路という二系統の掘割に接する場所に位置しており、この集落の構造上の中核にも位置していたとみなすことができる。

また、「中心区画」内は、東西溝SD570によって大きく北半と南半とに区画されており、さらにその内部は柵などによっていくつかの区画に細分されている。SD570の北側に沿って道路が存在したと考えられるが、この溝は周囲の施設に先行してⅡ期後半古段階には埋められたようである。

なお、南北溝SD1170・2070の西側にも遺構・遺物の密度の高い区域が展開しているが、その西側は芦田川によって削平されており、この区画の具体的な姿は明らかにできていない。しかし、「中心区画」同様に出土資料の質・量が卓越していることや、11個の甕を並べて埋設した埋甕遺構SX2400が存在することなどから、有力な商人・職人の居住域に比定されている〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所（編）1996〕。

さて、この「中心区画」の拠点性を示すと考えられる資料の一つが、この区域で検出している井戸の構造である。草戸千軒町遺跡では209基の井戸跡を調査しており、そのほとんどには土砂の崩落を防ぐための井側（井戸枠）が設置されている。井側の材質には、木・石・陶器などがあるが、全体の83%に相当する173基が木組みの井側をもつものである〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所（編）1996〕。

木組井戸はその構造に応じた「格」を有していたことが、岩本正二により論じられている〔岩本1993〕。すなわち、遺跡全域に普遍的に分布するのが方形縦板組の井戸で、これよりも「格」が高いと判断できるのが、方形横板組および多角形縦板組の井戸である。とくに、多角形縦板組の井戸は「中心区画」とそれに隣接する区画に集中しており、社会的に優位な立場にあったと考えられる区域に分布している（図6）。図5に示した井戸では、SE1145・1229・1231・1255・1285・1560・1996・2163が該当し、中心区画北半に集中して分布している。これに次ぐと考えられる構造が方形横板組で、特定の区域に集中する傾向は顕著ではないものの、集落各区域において中核的な役割を果たしたと考えられる場所に分散して立地する傾向がある。図5では、SE1229・2163・2350・3225が該当する（複合構造の井戸も存在する）。こうした井戸の「格」はその立地だけでなく、木材加工技術や構成材の品質にも示されており、「格」の高い井戸は良質の材が高い加工技術によって構築されている〔鈴木2015〕。井戸の「格」は、経済力や権力なども反映していると考えられるのである。

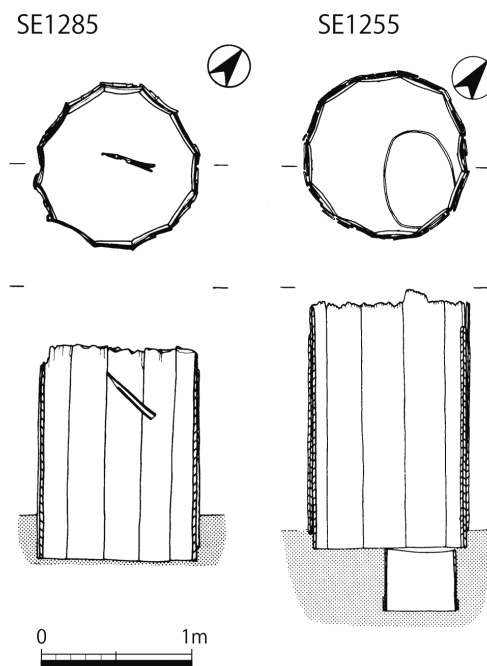


図6 多角形縦板組井戸

「中心区画」とその隣接区域に集中的に分布する多角形縦板組の井戸は、岩本も指摘するとおり京都の七条町・八条院町といった商工業の発展した場所、あるいは鎌倉の今小路西遺跡のような武家政権の中核にあると考えられる人物の屋敷などで検出されている井戸の構造であり〔岩本 1993〕、「草津」の「中心区画」の住人も、経済的あるいは政治的に卓越した存在であったと考えることができる。

## (2) 木簡が示す地域経済拠点

草戸千軒町遺跡の出土資料を代表するものの一つに木簡がある。遺跡全体では4,782点の墨書木札類が出土しており、そのなかには呪符や・板塔婆・闘茶札・聞香札あるいは削屑なども含まれている〔広島県立歴史博物館（編）1999・2000・2004〕。この集落の地域経済拠点としての特質を考えるとくに注目されるのは、商品・金融取引に関する木簡である。本稿で問題とする鎌倉時代の木簡が集中して出土した遺構としては、中心区画北半に位置するSK1300土坑がある。

1331年頃に埋められたと考えるこのSK1300からは、約50点の木簡・木札などが出土しており、「くさい（つ）」「さかへ」「つの（郷）」「きのしゃう」といった集落近隣の地名や、「こめ」「ミそのまめ」「あふら」「あらむき」「しらけむき」といった食品・農作物、「二くわん二百文」「二百十文」などの金額、「ミしん」「なかす」「かう」「うり」「一はいりいたす」といった商品・金融取引に関する行為などが記されている〔広島県立歴史博物館（編）2000〕。これらの木簡の出土により、集落が芦田川下流域の近隣地域と結びつきをもちながら、農作物等の売買、味噌の醸造、銭の貸し借りといった多様な経済活動の舞台となっていたことが明らかになる。同時に、SK1300の位置する「中心区画」北半が、集落近隣地域に影響力をおよぼしながら、商業・金融・食品醸造活動に関与する人物の拠点であったことが想定できるのである。

いっぽうで、これら鎌倉時代の木簡に記された地名は、長和荘あるいはそれに隣接する地域のものに限られており、それ以外の遠隔地の地名が確認できない点には注意する必要がある。これまで、「草津」の集落は芦田川中・下流域の経済拠点であり、遠隔地との結びつきは鞆など瀬戸内海の拠点港湾を介することによって可能になっていたと理解してきたのも、こうした木簡に記された地名の比定地の範囲が根拠の一つであった。したがって、前述のように長井氏の備後国内の所領を瀬戸内海水運に結び付ける拠点と想定した場合は、少なくとも木簡の記載内容からは、所領経済の集約拠点としての性格はうかがえないことになる。もちろん、集落の経済活動のすべてが木簡に記されわけではなく、集落に存在した木簡のすべてが出土資料として得られているわけではないが、木簡に記された経済活動が集落の機能とどのように関係し、地域社会のなかにどのように位置づけられるのかは、今後とも検討していく必要がある。

## (3) 会所と闘茶札

以上に示したように「中心区画」の北半は、商品・金融取引といった経済活動や食品加工の実務に関与する場所であった可能性が高いが、南半の状況はこれとは異なっている。

「中心区画」南半の遺構をみると、西寄りの南北道路に面する場所にはいくつかの井戸や土坑・掘立柱建物などが密集し、居住域としての性格を示しているが、東半の広い範囲には井戸がまった

く存在していない。この区域の北部に位置するSG1791・1790は重複して存在する池状遺構で、その検出状況がやや複雑であることから形成過程の復元には困難な部分もあるが、およそ次のような変遷を想定している〔鈴木2010・2018〕。

まず、SG1791という池状遺構がⅡ期後半に入る頃に構築され、その周辺、おそらくは池状遺構の南側に設けられた施設で、闘茶などの饗宴が繰り広げられていたと考えられる。しかし、Ⅱ期後半新段階、すなわち1331年頃にそれらの施設が廃絶し、饗宴で使われた闘茶札や天目茶碗・褐釉陶器小壺（茶入）などの喫茶に関わる道具、白磁四耳壺・青白梅瓶・吉州窯系鉄絵瓶子（図7）といった座敷飾りに使われた可能性のある陶磁器などが池状遺構に一括して廃棄されている。集落の停滞期を経たのち、Ⅲ期（15世紀前半）になるとここに倉庫建物（土蔵）が建設されることになり、その基礎施設である掘込地業としてSG1790が構築されている<sup>(9)</sup>。闘茶札や天目茶碗・褐釉陶器小壺をはじめとする遺物がⅢ

期の遺構と判断されるSG1790からも出土しているが、これはSG1791を掘り返してSG1790を構築した際に、SG1791の埋土がSG1790の埋土に混入したためと考えられる。

「中心区画」南半の闘茶が行われた施設は、茶道具などの儀礼的な陶磁器の存在から「会所」と呼びうる施設であったと考えられ、SG1791・1790から出土した闘茶札の記載からは、「本非十種茶」「四種十服茶」といった闘茶が行われていたことが復元できる〔下津間1988、広島県立歴史博物館（編）2004〕。闘茶に関する初見資料は、元弘2年（1332）の『花園天皇宸記』とされているが〔神津2009〕、それとほぼ同時に、備後国に位置するこの港湾集落においても闘茶が行われていたことが確認できるのである。

以上に示したとおり、「中心区画」の北半が商品・金融取引あるいは食品加工といった、いわば世俗的な生業活動の場であったのに対して、南半には会所の機能を有する施設が存在し、そこは吉州窯系鉄絵瓶子に代表される陶磁器で室礼を施し、唐物の天目茶碗・茶入を用いた闘茶会が繰り広げられるという、いわば非日常的な場であったと考えられる〔鈴木2018〕。「草津」の集落では、こうした多様な活動が展開され、そこに地域拠点としてのこの集落の特質が示されているといえる。とくに闘茶は、当時最先端の文化活動であったと考えられ、それを催した主体としては、備後守護・長井氏に連なる卓越した地域勢力を想定せざるをえないだろう。

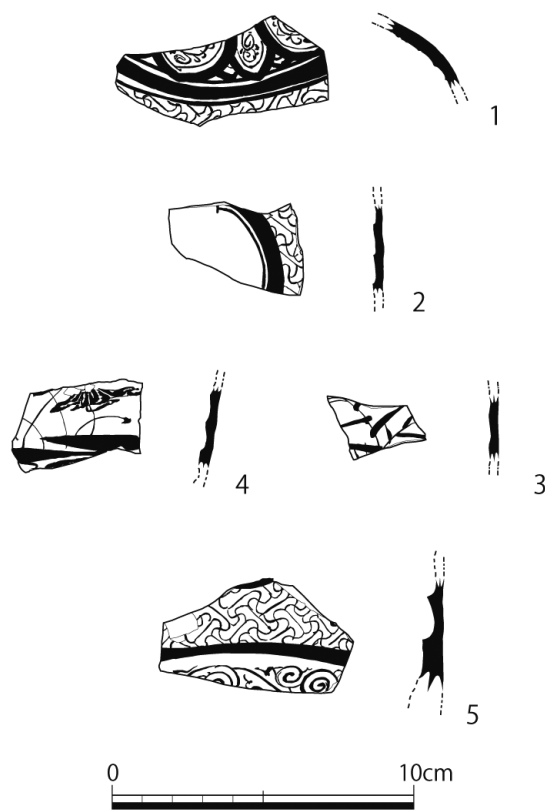


図7 吉州窯系鉄絵瓶子



## おわりに

草戸千軒町遺跡の発掘調査によって明らかになった「草津」の集落において、人々がどのような活動を繰り広げ、周辺地域とどのような結びつきをもっていたのか、さらには日本列島の中世社会のなかに、この集落の特質をどのように位置づけることができるのか、これが本稿における筆者の根本的な問いである。それを解決する手段として、御家人・長井氏の動向を手がかりに、関連資料から集落と領主権力との関係を検討した。とくに、遺跡内の「中心区画」と呼ぶ区域には、この場所が地域社会の拠点として機能したことを示す資料が集中しており、その背景に武家領主の存在が想定できることを論じた。

しかしながら、固有名詞をもたない考古資料から、直接的に領主権力、すなわち長井氏の集落への関与を示すことはやはり困難であった。課題の解決にいたることはできなかったが、本稿で示したような出土資料の分析・検討の積み重ねしか、目的に到達する方法はないように思われる。引き続き、出土資料の分析を進めていきたい。

## 註

(1)——発掘調査成果の概要については、[岩本 2000, 鈴木 2007]などを参照のこと。また、発掘調査報告は[広島県草戸千軒町遺跡調査研究所(編)1993・1994・1995a・1995b・1996]として刊行されている。

(2)——[網野・司 1988]などに当時の「草戸千軒」に対する評価が示されている。

(3)——近年、木村信幸は関連史料に記された「草出」「草土」「草津」「草井地」など複数の地名を比較検討し、それら相互の関係を空間構成の視点から理解する説を発表している[木村 2020]。ただ、こうした空間構成と地名との関係が当時一般的であったのかどうか、他に同様の事例があるのかなどについては明らかではない。ここでは、筆者の従来の解釈どおり、「草津」「草土」を時期的な変遷として捉えておきたい。

(4)——底を抜いた曲桶を1～3段重ねて埋設した施設

である。構造は井戸に似るものの、掘形の底面が湧水砂層にまで達していないため、曲桶埋設遺構として区別している。溜井戸などの機能を果たした施設だと考えられる。

(5)——南部水路と仮称している[鈴木 2016b]。

(6)——北部水路と仮称している[鈴木 2016b]。

(7)——停滞期の遺構・遺物が少ないため、明確な土器型式を設定できていないが、この時期の土器を仮にⅡ期後半最新段階としている。

(8)——室町時代の木簡には、現在の福山市駅家町から府中市にかけての芦田川中流域の地名を確認することができる。

(9)——SG1790の上に建設された倉庫建物SB1781については、[鈴木 2010]において論じた。

## 引用・参考文献

- 網野善彦 1984 「中世都市『草戸千軒』」『草戸千軒町遺跡(日本の美術 No.215)』至文堂, pp.85-92  
 網野善彦・司修 1988 『河原にできた中世の町—へんれきする人びとの集まるところ—』岩波書店  
 岩本正二 1993 「西日本の中世井戸—広島県草戸千軒町遺跡の井戸をめぐって—」『考古論集(潮見浩先生退官記念論文集)』潮見浩先生退官記念論文集刊行会, pp.775-788  
 岩本正二 2000 『草戸千軒(吉備考古ライブラリー6)』吉備人出版  
 河合正治 1974 「北条氏の隆盛と草戸千軒町遺跡」『金沢文庫研究』第20巻第8号, 神奈川県立金沢文庫, pp.14-18  
 木村信幸 2020 「史料から見た草戸千軒」『広島県立歴史博物館 研究紀要』広島県立歴史博物館, pp.17-30

- 小泉宜右 1970「御家人長井氏について」『古記録の研究』統群書類従完成会
- 神津朝夫 2009「茶の湯の歴史」角川学芸出版
- 国宝明王院五重塔修理委員会（編）1962『国宝明王院五重塔修理工事報告書』国宝明王院五重塔修理委員会
- 国宝明王院本堂修理委員会（編）1964『国宝明王院本堂修理工事報告書』国宝明王院本堂修理委員会
- 小林定市 1998「古文書から見た長和庄の長井氏」『中世を読む』第3・4号，備陽史探訪の会，pp.27-37
- 小林定市 2004「律宗奈良西大寺の末寺草出常福寺」『山城志』第18集，備陽史探訪の会，pp.45-57
- 佐藤進一 1971『増訂 鎌倉幕府守護制度の研究』東京大学出版会
- 下津間康夫 1988「關茶札とその背景—SG1790・1791出土の墨書木札類から—」『草戸千軒』No.182，広島県草戸千軒町遺跡調査研究所，pp.1-5
- 鈴木康之 2005「草戸千軒をめぐる流通と交流」『中世瀬戸内の流通と交流』塙書房，pp.119-157
- 鈴木康之 2007『中世瀬戸内の港町 草戸千軒町遺跡（シリーズ「遺跡を学ぶ040」）』新泉社
- 鈴木康之 2010「瀬戸内の港湾集落と蔵—広島県草戸千軒町遺跡の事例—」『都市と城館の中世—学融合研究の試み—』高志書院
- 鈴木康之 2012「瀬戸内海沿岸部における都市的な場—「草戸千軒」の成立状況を中心に—」『都市的な場（中世都市研究17）』山川出版社
- 鈴木康之 2015「港湾集落における木材加工技術—草戸千軒町遺跡の井戸材を中心に—」『木材の中世—利用と調達—』高志書院，pp.85-102
- 鈴木康之 2016a「『草戸千軒』をめぐる人々—常福寺の住持・沙門頼秀とは—」『芸備地方史研究』第300号，芸備地方史研究会，pp.85-89
- 鈴木康之 2016b「港湾集落『備後草津』の特質—草戸千軒町遺跡の調査成果から—」『中世港町論の射程』岩田書院，pp.147-174
- 鈴木康之 2016c「草戸千軒町遺跡における集落の画期とその暦年代—木簡に記された十二支にもとづく試案—」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室50周年記念論文集・文集』広島大学考古学研究室50周年記念論文集・文集刊行会
- 鈴木康之 2018「草戸千軒町遺跡出土資料にみる鎌倉時代の『会所』と『唐物』」『家具道具室内史』第10号，家具道具室内史学会，pp.22-37
- 広島県（編）1984『広島県史 中世（通史Ⅱ）』広島県
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所（編）1993『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ』広島県教育委員会
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所（編）1994『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』広島県教育委員会
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所（編）1995a『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』広島県教育委員会
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所（編）1995b『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ』広島県教育委員会
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所（編）1996『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』広島県教育委員会
- 広島県立歴史博物館（編）1999『草戸木簡集成1（草戸千軒町遺跡調査研究報告3）』広島県立歴史博物館
- 広島県立歴史博物館（編）2000『草戸木簡集成2（草戸千軒町遺跡調査研究報告4）』広島県立歴史博物館
- 広島県立歴史博物館（編）2004『草戸木簡集成3（草戸千軒町遺跡調査研究報告6）』広島県立歴史博物館
- 広島県立歴史博物館（編）2013『備後渡辺氏に関する基礎研究（草戸千軒町遺跡調査研究報告11）』広島県立歴史博物館
- 福山市教育委員会（編）1997『草戸千軒町遺跡—法音寺橋改築工事に伴う発掘調査報告書—』福山市教育委員会
- 平凡社（編）1982『広島県の地名（日本歴史地名大系35）』平凡社

（県立広島大学地域創生学部，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2022年11月21日受付，2023年3月31日審査終了）

---

## **Bingo “Kusazu” and the Nagai Family : A Port Town as a Feudal Lord’s Base**

SUZUKI Yasuyuki

The Kusado Sengen-cho site is the site of a medieval port town located in Fukuyama City, Hiroshima Prefecture. The results of the excavations have revealed that the port town was founded in the middle of the 13th century, declined in the middle of the 14th century, was redeveloped in the first half of the 15th century, and survived until the beginning of the 16th century.

In the site, there was an area that is considered to have played a significant role in the management of the settlement, as the quality and quantity of excavated artifacts are outstanding in this area. Many wooden tablets with inscriptions have been unearthed from there, and it is known from the inscriptions that there were people who traded goods with neighboring areas and lent money with interest. Wells with high-class structures were built intensively in the area. In addition, wooden tablets showing that tea ceremonies called “Tocha” were held in the 14th century were unearthed along with the Chinese tea bowls and tea containers used in tea ceremonies.

From these unearthed materials, it can be seen that residents of this area exerted influence on the economic activities of the neighboring area and were able to hold state-of-the-art cultural events at the time. Such a person can be identified as a person related to the Nagai family, who was an immediate vassal of the Kamakura shogunate and was appointed as the Commissioner of Bingo Province.

Key words: Kusado Sengen-cho site, medieval port town, regional economic base, tea ceremony called “Tocha”